1章　未知の時代を切り拓く人材育成を考える

１．国の発展と大学の役割・責任

（1）成長社会から成熟社会、共生の社会へ

我が国を支えてきた大量生産・大量消費による経済成長が終焉を迎えている。日本は先進国に追いつき追い越すことを目指して高い成長を遂げてきたが、経済・財政の危機、少子高齢化、雇用環境の悪化、国際競争力の低下など地球規模で激変する社会にこれまでの成長モデルは通用しなくなった。

これからは「成長社会」から精神的豊かさや生活の質の向上をもたらす持続可能な活力ある「成熟社会」を目指すことになるが、その目指すモデルはまだ世界に見当たらない。日本は、社会が抱える課題を克服する課題解決の創出国として自ら新たな成長分野を創り出し、チャレンジしなければならない。

そこでは、生きとし生けるものとの共存、倫理観に根差した公正な社会秩序が保たれ、安らぎや生きがいを実感できる社会が求められる。また、地球的規模で経済、環境、資源などの利害調整が複雑化する中で、一国の利益を優先することよりも世界の国々と連携・協調し、良好な相互依存関係を創り出す共生の社会が希求される。

（2）「個の力」の育成

成熟社会、共生社会の実現には、政治、経済、科学技術、教育、文化など総合的な「国の力」が問われてくるが、その源は市民一人ひとりの多様な「個の力」であり、とりわけ未来に立ち向かっていく若者世代の力である。今日の社会は、高度な情報通信技術の発達により「ヒト・モノ・カネ・情報」が世界的な規模で移動し、ネット上に市場やコミュニティが展開している。あらゆる分野に境界がなくなり、変化が速くなり、「個」が情報を自由に発信できるようになった。同じ志を持つ人々と連携・協働できる地球的な市民社会が形成されつつある。

そのような社会では、市民一人ひとりがそれぞれの立場で世界や地域の変化を見定め、課題をとらえ、他者との連帯の中で直接・間接的に責任を持って対応していくことが求められてくる。それには「個の力」を発揮できる「多様な分厚い中間層」の育成強化が喫緊の課題となる。正に「個の力」の成長なくして、日本の再生と発展は望めない。

（3）大学の役割と責任

我が国は、経済・財政危機、少子高齢化と生産人口の減少、雇用情勢の悪化、エネルギーの確保、地球温暖化などの課題が山積しており、未来への展望が描けないでいる。

その解決を政治や国に期待することに限界がある中では、市民それぞれの力を組み合わせて、日本全体で新しい価値を創り出していく仕組が肝要である。とりわけ、既成概念やしがらみにとらわれない、若者の新しい発想力・行動力の育成が重要で、それを訓練する場として大学の教育が期待されている。

大学は、未知の時代を託す若者が未来を切り拓いていく「意欲」と「能力」を育くめるように「個の力」を強化・充実する責務がある。総力をあげて学生一人ひとりに最良の教育を提供していく社会的責任を負っている。教職員のための大学ではなく、学生のための大学となるよう意識の大転換が迫られて